GyouseiNews.Com The Gyousei Chosa Shimbun 行政調査新聞

＜海外情勢＞

好 機 到 来 ！ ＜連載第3回＞

大転換時代の勝利者となれ！　アジアが輝く時代がやってくる

ペンス副大統領「邪悪な中国共産党との戦い」

米中貿易戦争が熾烈になっている。米中の駆け引きは激しさを増し、世界経済に暗い影を落とす。日本もその影響を受けて、６年ぶりに景気を**「悪化」**に引き下げることとなった（５月 15 日）。米中貿易戦争はさまざまな角度から分析されるが、貿易量や関税率などの数字ばかりが前面に出ている。本質はカネの問題ではない。それを認識すべきである。では本質はどこにあるのか。

昨年 10 月にペンス米副大統領が米国民に向けて対中政策に関する 40 分以上の演説を行った。そのタイトルは**「邪悪な中国共産党との戦い」**である。米中貿易戦争の本質をここから読み解くことができる。この演説でペンス副大統領は中国を**「米国に挑戦する国」**と決めつけている。中国と戦うことに**「大統領も米国民も決して退くことはない」**と断言。**「米国と中国は１つの天の下に存在できない」**として、中国に勝利することを宣言したのだ。40 分以上にわたる演説は本格的な論考だが、その前半に米国の主張がはっきりと表れている。それは以下のような内容である。

✔19 世紀後半から 20 世紀にかけて中国は、西欧列強や日本に侵食され半ば植民地化させられた。とくに日本の侵出は凄まじく、武力で中国を完全に掌握しようとした。
日本の侵出に対し、米国は中国の主権を守ろうと力を貸した。
中国最大の大学である精華大学の設立も米国の手によってなされた。
（注：精華大学の前身である「精華学堂」は 1911 年に米国留学予備校として米国が設立を援助。）

✔21 世紀に入り、米国は中国を WTO（世界貿易機関）に招き入れた。
そのうえ、中国が米国市場に参入することも許可した。中国の急激な経済成長は米国の投資によって成し遂げられた。

✔ソ連共産党政権はその過ちにより崩壊し、米ソ冷戦は終わった。その時点で中国は政治的に自由化すると考えられた。しかし、個人の財産…宗教の自由…人権の尊重などを中国共産党政権は無視しつづけた。

✔21 世紀に入ってから、これまでの 17 年間で中国経済は 9 倍に拡大し、世界第 2 位の経済大国になった。それは、自由や公正とは無縁の為替操作・技術移転の強要・知的財産の盗用などを駆使して得られたものだ。

ペンス副大統領のこの分析は、米国人からすると**「当然の主張」**かもしれない。中国にいわせれば**「米国の身勝手な言い分」**と切り捨てたいところだろう。経済面しか考えない今日の日本人からすると、早く話し合って解決の道筋を見つけろと言いたくなる。

だがペンス演説の奥底に、非常に重要な主張が見え隠れしている。ペンスは第一に**「これまで中国を支援しつづけた米国の恩義を忘れるな」**と言っている。

そして次に**「民主主義的な価値観を持つことは、国として当然のこと」**と決めつけている。第一にあげた**「米国の恩義」**こそ、蒋介石が嫌った**「押しつけ」**である。

米国は中国を足下に置き、いざというときに米国を助ける国にしようとしてきた。

そして**「民主的な価値観」**とは、東アジアの価値観に反するものなのだ。

王岐山「西欧の制度や価値観は入り込めない」

ペンス副大統領の**「邪悪な中国共産党」**という演説に中国もすぐに反応を示した。

国内で発表された向松祚（こうしょうそ＝国際通貨研究所理事長）の論文などがその代表例だろう。国際的な舞台で最初に反論を展開したのは、今年（2019 年）1 月末のダボス会議（世界経済フォーラム）での王岐山（おうきざん）演説だった。

王岐山は 2012 年に習近平体制ができたときに**「実質 NO. 2」**と呼ばれた実力者である。アジア金融危機（1997 年）やリーマン危機（2008 年）に際して、大規模な景気刺激策により世界最速のＶ字回復を成し遂げた実力者で、世界からは**「中国共産党随一の経済実務家」**と評価されている。王岐山のダボスでの演説も 1 時間半以上に及ぶものだったが、その要点をみてみよう。

✔中国の進路のカギを握るのは、中国自身の歴史や文化・哲学である。
そこに西欧の制度や価値観が入り込むすき間はない。

✔我々は中国共産党の初心を忘れない。
中国共産党による領導を保ち続け、社会主義の政治経済制度を堅持する。

✔我々は人民を中心に据える思想を堅持する。政権の創設時から今日までの長い紆余曲折の道のりは、困難や曲折に満ちたものだった。正しさと過ち、経験と教訓のなかで、高い代償も払ってきた。
その中で輝かしい成果を得て、中国の特色ある社会主義の道を開拓してきた。

✔発展の不均衡問題は発展によって解決するしかない。パイ（分配される利益）そのものを発展によって大きくしなければならない。
中国共産党は**「発展の哲学」**を依然として保持している。

✔すべての国は、それぞれの主権を尊重しなければならない。技術覇権を求めない。他国の内政に干渉しない。他国の国家安全に危害を与えるような技術活動に従事しない。各国が自ら選択した公共政策・技術管理モデルを尊重し、世界共通の技術に平等に参加する権利を尊重することが重要である。

ペンス副大統領の**「邪悪な中国共産党」**という演説に対する反論として、中国共産党の立場を解説した部分は、実際は長文で内容も細部にわたる。だが何より重要なことは王岐山演説の冒頭部である。**「中国の進路のカギを握るのは、中国自身の歴史や文化、哲学である。そこに西欧の制度や価値観が入り込むすき間はない」**

ここに王岐山演説の全身全霊が籠められているといっていいだろう。

東洋の「価値観」 西欧の「哲学」

中国の価値観・哲学・文化は欧米のものとは異なる。それは当然のことである。民族も気質も、気候風土も食糧事情も、そして天や神といった存在に対する考え方も違うのだ。日本を含め、東洋には東洋の哲学があり文化がある。日本と中国は異なるが、それは西欧との差のように大きなものではない。

日本には 2000 年、3000 年と中国を初めとする東洋の文化・哲学・宗教が流れ込み、また日本の文化・哲学がアジアをつくり変えた面もあり、大きく見れば一体感のあるアジア文明をつくり出している。その東洋の文化・哲学は、西欧とは一線を画する。

西欧と東洋がどのように違うのかを論じるには、膨大な解説が必要で、分厚い本が何冊分かになるかもしれない。簡単に示すときに病気治癒の例が使われることがある。

西欧の医学では対症療法が用いられる。熱が出れば解熱剤が投与され、咳が止まらなければ咳止めの薬が使われる。一方インドや中国・日本などでは病気を起こす本質の理由が求められる。熱を出した本当の理由は何か、咳が止まらない奥深い原因はどこにあるのか。その根源から治癒しようとする。これは簡単に述べただけであり、現実には西欧医学にも根源的な原因を探る面もあれば、東洋医学にも対症療法が存在する。

別な角度から、西欧の考え方、公理（**ものごとの基本的仮定**）を大ざっぱに説明してみよう。西欧の公理は、アリストテレスの**「要素還元主義」**に端を発する。

物質の根源を元素・分子・原子…に求める考え方は、すべてに関して根源的理由を求め、ものごとを細分化して分析・解析する。その姿勢は人類文明を進化発展させ、得られた科学技術が人類を豊かにし、ついには人工知能を生むまでに至った。要素還元主義に端を発した西欧の公理は、すべてを細分化し未知の世界を切り拓く**「フロンティア・スピリット」**を善とする。

前進して征服する精神、未開の地を開拓して自分たちの世界に組み込むことが正義となり、それが西欧を覇道に導いた。覇道は統制された強力な国家権力によって達成され、必然として支配階級から末端に至るピラミッド構造を作り上げる。

一方日本や中国では、すべてを見渡して全体像を構築する。

「一粒の砂の中に全宇宙を観る」という在り方が求められる。西欧と東洋の差は、古くから論じられてきた。だが 20 世紀以降、とくに第二次世界大戦以降のグローバル化・世界ワンワールド化の潮流の中では、**「洋の東西」**などという二分割論は姿を消していた。ダボス会議（**世界経済フォーラム**）での王岐山の演説は、東洋と西欧の歴然たる差を口にしたものだ。そのテーマは古いものなのに、世界に衝撃を与えるほど新鮮さに満ちていた。改めて世界に**「洋の東西」**の差を示したといえるだろう。そして同時に、現在の中国の原点を生み出した巨人の残像が浮かび上がってくる。大陸中国でも台湾でも**「国父」**と崇められている孫文（**孫中山**）である。孫文（**孫中山**）は百年近く昔の大正 13 年（**1924 年**）に日本の神戸で**「大アジア問題」**という講演を行ったが、こんにちなおアジアと西欧が抱える問題点をここに見ることができる。

孫文の演説と大アジア問題

大正 13 年（**1924 年**）11 月 28 日、孫文（**孫中山**）は兵庫県神戸市の第一神戸高等女学校で**「大アジア問題」**と題する講演を行った。

「諸君、本日諸君の最も熱誠なる歓迎に応じて、自分は誠に感謝に堪えぬのであります。今日みなさんに申し上げるところの問題は、すなわち大アジア主義であります」

こう切り出した孫文の演説内容は、こんにち全文が公表されている。

当時は録音設備がなかったため、孫文（**孫中山**）の演説は速記で記録された。

その速記に基づいて書かれた演説内容は、**「大阪毎日新聞」「神戸新聞」「民國日報」**（**上海**）演説の本質は３紙とも同じで、次のような内容である。

「アジア固有の文化を共有するアジア民族は、仁義道徳によって団結し、世界を支配しようとする西欧文明の植民地主義と闘い、平等な国際社会を実現しよう」。

さらに演説の終わりのほうでは、こう言っている。

「大アジア問題というのは、すなわち文化の問題でありまして、この仁義道徳を中心とするアジア文明の復興を図りまして、この文明の力を以て彼らの覇道を中心とする文化に抵抗するのである。大アジア問題というのは、我々のこの東洋文化の力を以て西洋の文化に抵抗するという、西洋文化に感化力を及ぼす問題である」

「我々のこの覚醒は、すなわち文化を扶植する、文化を復興する運動である」

この記述は**「大阪毎日新聞」**から引用したものだが、内容は３紙ともほぼ同様である。だが演説の末尾、結びの言葉に関しては、上海の孫中山記念館に残る**「民國日報」**だけが特異な文章を残している。

それは、**「大アジア主義は、王道を基礎とし、世界諸民族の平等な関係をうちたてることをめざす。日本民族は、覇道の文化を習得し、かつ王道の文化の本質を備えている。では、世界の文化の前途に対して日本は西方覇道の鷹犬（ようけん）となるのか、それとも東方王道の干城（かんじょう）となるのか、日本国民は慎重に考え、選択していただきたい」**というものだ。

この文章は、**「大阪毎日新聞」「神戸新聞」**の２紙には載っていない。だが、孫文が演説の中で「日本は西洋覇道の鷹犬（使い走り）となるのか、東洋王道の干城（守り手）となるのか」と問いかけたという話は、広く流布されている。**「民國日報」**だけに書かれたものなので、孫文が本当にこう演説したかどうかは不明だが、これほど流布されているからには、おそらくこの文章は存在したと考えられる。

この演説に対して「日本は西洋覇道も東洋王道も目指さない。日本独自の皇道を歩むのだ」と息巻く自称愛国者たちがいるとも聞く。孫文の演説の真意を知れば、エセ愛国者の妄言がいかに見当違いであるか理解できる。では孫文の真意はどこにあるというのか。それを知るためには何より孫文の本質を知る必要がある。そのために、ちょっと余談的な話ではあるが、孫文がなぜ**「孫中山」**と名乗ったのかを考察してみたい。

孫文の号「中山」に秘められた驚愕の真実

孫文は大陸でも台湾でも**「国父」**と呼ばれ尊敬されている。孫文が生まれた広東省翠亨（すいきょう／チョイハン）村は、**孫中山**（孫文）にちなみ**「中山市」**となっている。

台湾には中山公園・中山路など、大陸にも中山公園・中山大学など、孫文の号から命名された地名・施設は大変多い。1989 年（平成元年）に南極に開設された中国最大の南極基地・中山基地も孫文の号を冠にしている。ソ連が中国統一に協力する証として 1925 年（大正 14 年）にモスクワに作った**「モスクワ中山大学」**も孫文の号から名づけられている。

孫文が**「中山」**という号に固執していたことは事実で、その**「中山」**が地名や大学名などに使用されているのだ。ちなみに中国では戦国時代（紀元前５世紀～紀元前３世紀）に河南省の中央部に**「中山国」**という小さな国があったが、この国の実体は不明で、遊牧民族が侵入して造った国とされる。中国では、この小国の名**「中山」**が使用されることは、その後はなかった。それでは孫文の号**「中山」**は、どこから生まれたのだろうか。

「ネット上の百科事典」ともいわれる**ウィキペディア**を見ると、こんな記述がある。（令和元年５月 27 日現在）

「中国では孫文よりも孫中山の名称が一般的であり、孫中山先生と呼ばれている。（中略）孫文は日本亡命時代には、東京府の日比谷公園付近に住んでいた時期があった。公園の界隈に『**中山**』という邸宅があったが、孫文はその門の表札の字が気に入り、自身を孫中山と号すようになった。日本滞在中は『**中山樵**（なかやまきこり）』を名乗っていた。なお、その邸宅の主は貴族院議員の中山孝麿侯爵で、孝麿の叔母中山慶子（中山一位局）は明治天皇生母である」この記述はあちこちで引用されており、信憑性が高いものと思う方も多いだろう。だが大部分がデタラメである。

中国から亡命してきた孫文は、明治 30 年（1897 年）８月に東京に住むようになった。だが日比谷公園ができたのは、明治 36 年 6 月である。明治 30 年の地図を見ると、皇居日比谷門の東側に東京鎮台、その隣に工兵第一方面本署が並び、その南側に**「中山邸」「萬里小路邸」**という貴族の屋敷が２つ並んでいる。孫文が住んだ近くに、中山という貴族の屋敷があったのだろうと納得されるかもしれないが、**「東京府の日比谷公園付近に住んでいた」**という記述がそもそも間違いである。

孫文は、東京では最初に半蔵門に近い平河天満宮の脇に居を構えた。その後まもなく、犬養毅に斡旋された早稲田鶴巻町に移転している。最初に住んだ平河町から日比谷の中山邸まで、急ぎ足で歩いても 1 時間はかかる。**「付近に住んでいた」**という記述は明らかにおかしい。そこを無理して、**「徒歩 1 時間は付近といえる」**と強引に呑み込んだとしても、孫文が**「中山」**という単純な漢字の表札が気に入って自身の号にしたという物語は、あまりにもおかしい。孫文ともあろう人間が、見も知らぬ他人の家の表札を自分の号にするものだろうか。革命家・孫文を少しでも理解すれば、これが作り話だということに気づくはずである。

これとは別に、中国で出版された**『孫中山与日本』**（段雲章・広東人民出版社）、**『孫中山年譜長編』**（陳錫祺編・中華書局）や、日本で出された**「辛亥への道・孫文」**（陳舜臣・中公文庫）、**「犬養木堂伝」**（鷲尾義直編・原書房）などには、日本に亡命してきた孫文が新橋から数寄屋橋の旅館に移動する際に日比谷公園近くで中山邸の豪壮な建物を見て、そこから名を取ったとの記述があるが、これも完全な作り話である。

では、なぜ孫文は**「中山」**という号を名乗ったのか。これを説明するには長大な物語を要するが、本稿の主題から逸脱するので極めて簡単に述べることにする。

孫文は**「尊王運動」**に共感し、その運動家たちと深い関係をつくり孫文自身も**尊王運動**に身を置くようになったのである。**尊王運動**を広げる一群のリーダーとして**光格天皇**の血筋をひく**「京中山」**という一族がおり、孫文はその京中山家に**養子**（猶子）として入籍した。それゆえ**「孫中山」**と名乗っているのだ。その記録は、今日も残されている。ちなみにその京中山家は、日比谷に大邸宅を構えていた中山孝麿侯爵ではない。

また、**「尊王運動」**についても誤解されている面が多い。**「尊王」**を**「尊皇」**、すなわち**「皇室を尊ぶ」**とする思想に置き換えてしまうことが一般的になっている。

本来の**「尊王」**とは**「覇道」**と対立する概念であり、明治期の尊王運動はこの意味で使われ、孫文もその運動に加わったのである。**「尊王」**とは中国の春秋時代（**紀元前８世紀～紀元前４世紀**）に生まれた概念で、万人平等の理想社会を追求した周王朝の天子を尊ぶ思想を表す。

仁徳に基づく政治を**「王道」**と呼び武力に基づく、力づくの圧政を「覇道」と呼ぶ。

日本では鎌倉末期から南北朝にかけて天皇は**「王道を歩む存在」**であり、幕府（**武士**）は**「武力でものごとの解決を図る覇者」**と考えることが広まり、これが建武の新政への原動力となった。日本では古来、**「王道」**を天皇による仁徳の政治と捉えていた。

江戸時代末期から幕末にかけて、**尊王思想**と**攘夷運動**が結びついて**「尊王攘夷」**が叫ばれ、外国人排斥・民族主義・国家主義へとナショナリズムの高まりを見せていくが、**「尊王」**の本質は**「仁徳に基づく王道政治」**である。

孫文（**孫中山**）は日本で展開されていた**「尊王運動」**に身を置いた**光格天皇の血脈**を継ぐ京中山家の猶子となった孫文が、北京で客死する半年前に神戸で行った演説を、再度読み直して頂きたい。

「大アジア主義は、王道を基礎とし、世界諸民族の平等な関係をうちたてることをめざす。日本民族は、覇道の文化を習得し、かつ王道の文化の本質を備えている。では、世界の文化の前途に対して日本は西方覇道の鷹犬となるのか…それとも東方王道の干城となるのか…日本国民は慎重に考え選択していただきたい」

遠い将来において東洋と西欧が本質的な部分で対立することを、孫文は予見していた。西欧の合理と東洋の哲学がぶつかりあったとき、**「覇道の文化を習得し、王道の文化の本質を備える」**日本こそが、重大な役割を果たすと確信していた。

いま、まさに西欧合理と東洋哲学が激突する時代となっている。

「日本は西方覇道の鷹犬となるのか、それとも東方王道の干城となるのか」

孫文の言葉を今こそ噛みしめるべきではないだろうか。

―以下次号―